

書評：『ICUリベラルアーツの心 ——回想のワース先生』

吉駒 明子

一．戦後日本のキリスト教とリベラルアーツ

日本キリスト教史学会第60回大会が、2009年11月ICUで開催された。ICUも研究所開所から数えると60年というので、大会シンポジウムのテーマとして「戦後日本のキリスト教とリベラルアーツ」が選ばれ、大西直樹、梅津純一と吉駒明子が発題を行った（内容は『キリスト教史学』第64集に掲載）。この大会席上本書の刊行が報告され、懐かしいワース先生の本というので私も買い求め、会員（吉永契一郎、ICU31期）の新刊紹介も書いた。しかし、本書は、シンポジウムでカバーできなかった「理系」の教育に関わるものであるだけでなく、開学初期のリベラルアーツ教育のスピリットがドクター・ワースの中に生き生きと描かれていることに感銘を受けて、もっと詳しく紹介したいと思った。

日本にキリスト教大学をという動きは敗戦直後から日米両国に起こったが、戦争の痕跡が癒えない日本社会では、その願いも様々な思惑から自由ではありえなかった。例えば、キリスト教伝道はアメリカによる日本占領政策の一つの柱として語られ、国際キリスト教大学（ICU）もその手段の一つと見なされることがある。開学準備の過程でアメリカの側の提示した「リベラルアーツ・カレッジ」構想が日本側の構想にとって代わったこともこの見方の論拠とされている。事実はどうだったのか。開学2年目の秋にICUに赴任し、以来35年ICUでそのミッションに生きたワース先生の生涯は、そのような見方に対する一つの答えも示してくれるであろう。

本書は、第Ⅰ部回想録と第Ⅱ部自伝、それに略年譜からなる。もちろん、これは単なる個人史ではない。編者であり、本書刊行の呼びかけ人である吉永契一郎は、1987年ICU入学、物理学専攻の31期生、日本の高度成長期と学園紛争の時期を経てICUが初期のそれとは変わった時期にICUで学び、現在は東京農工大学准教授を務めている。ドクター・ワース召天の3ヵ月後にICU教会で催された追悼記念礼拝で、同僚や初期の卒業生の話を聞き、図書館に残されているドクター・ワースの自伝を読んで、吉永は終生変わらず真摯にICUで務めを果たされた先生と、先生たちが創り上げようとした創生期のICUの姿に思いを馳せたとのことである。かねて「キリスト教主義大学の本来のあり方は、リベラルアーツ・カレッジである」と考えていた吉永は、回想録の編集によって、「ドクター・ワースとその時代」を描き出し、リベラルアーツ・カレッジのサンプルの姿を明らかにしようと試みたのである。

第Ⅰ部の回想録に寄稿している人たちを、「荒れた60年代」（62年の授業料値上げ反対から始まる）を真ん中に置いて分けてみると次のようになる。①学生：初期（2～5期）—4人、「60年代」（8～12期）—3人、再建期（25～28期）—2人。②教員：a. 日本人教員（1人を除いて理学科）；60年以前に助手で赴任—5人、再建期の教員—5人（内1人は卒業生で日本語科）、この2つの時期、助手と事務職の両方の経験者—1人。b. Non-Japaneseの教員；再建期—3人（専門は、英語、歴史、心理）。③ICU教会牧師：2人。

第Ⅱ部の自伝Life Journeysはドクター・ワースが、ICUに来るまでに自分が受けた教育と、ICU在任中（1954～1989）に教育プログラムとキャンパス発展に関わり、また考えたところを、将来の資料とするために記してICU図書館に残したものである。

第Ⅰ部の回想の内、D・W・ラッカムの回想は、1988、89年のワース夫人も含めた聞き書きに基づくもので、自伝の背景にも言及されており、アーデイス夫人の文章共々、併せて読むことでドクター・ワースの自伝を

補うことができる。

二. 物理教育における特徴

ドクター・ワースの物理教育の特徴としてまず挙げることができるのは、電話帳ほども厚さのある英語のテキストであろう。彼自身「アメリカのテキストは分厚く、記述が詳細で、日本のものほど数学を用いていない」と述べているが、この古本を輸入して用いた。学生は専門用語だけでなく物理そのものを英語で学び、それがICU生の国際的活躍の場を拓けた。ドクター・ワースは、「年間を通じての講義内容を決め、それを各学期・週毎に割り当てて、それを予定通り進行させ」（石川）ていき、毎回の講義の後に、教科書の各章についている演習問題から、20～30題を指定して、学生に提出させた。学生が分かって分からなくても、どんどん進めて、最後に試験をするだけという日本の大学の講義様式とは全く異なっていた。大学に入ったら遊ぶという常識はICU生には無縁な忙しさであった。

第二が実験の重視である。国立大学を出て助手になった人は、学生時代「理論の本や論文を読み、理論の工夫をしたり計算を繰り返すだけ」で、「実験についての知識もなければ関心」もなかったという。ところが、ICUは違った。新設で国の予算など期待できない環境で、実験室は「工作機械室」だった。大型の旋盤、ドリルの他、鋸、ボルトナットなどの大工道具、米軍の払い下げ品の電子部品、火事場で拾った鉄のアンクル、木材などが所狭しと置かれていた（北村）。ドクター・ワースは「手作りの実験マニュアル」で、手作りの教材・実験装置によって実験をさせた。授業の前には必ず「グループ毎に決められたテーマの実験」についての点検を欠かさなかった（石川）。一般教育もデモンストレーション実験を行いながらの授業という形で行われたし、卒論でも、学生自身が実験装置から作ってデータをとりながら卒論を仕上げるものが求められた。この実験重視は、66年に新築された自然科学館になっても変わらず、教室には「演

示実験用のスペース」、振り子などをぶら下げられるキャッツウォーク、多方向からの照明装置の設置という形で現された。

こうして、学生は劣悪な環境のもとでも、できることをして課題をこなしていく姿勢と、実用的な知識を重んじる態度が養われたという（北村）。それは、ICUの学生のレベルや環境が専門教育化してなかったためもあるだろうが、実はドクター・ワース自身が歩んで来た道でもあった。経済恐慌と戦争の中で物理学教育を受けたドクター・ワースは、ウェステイングハウスの奨学生として工場で働き、戦時中には海軍研究所でレーザーの開発に関わって、ゼロから器械の設計図を書き、旋盤や溶接をして器機を創るという経験をしていた。

さらに、イェール大学大学院で博士号を取得した後、ICUが開学するのを待つ間に、開発の遅れた地域の大学教育を担うベリア・カレッジに勤務した。ベリアには物理の教員は二人しかおらず、小さい工作室に簡単な工具があっただけだった。また、専攻外の学生、それも「大衆化」された大学の学生に科学を教えるという経験にもなった。

既に当時ハーバードでは「一般教育運動」が始まり、「人間性の理解と科学技術の限界についての理解が大学教育の基盤である」という主張が出されていた。最後の年にはシカゴ大学の一般教育研修も受けたが、実際に学部の授業でディスカッションクラスを担当した。そこで彼は、「学生を教えるということは」単なる情報伝達ではなく、「産婆役として教師の力量が問われる」ことが分かったという。ドクター・ワースは、大学で物理学を教えるためのノウハウを得た上で赴任してきたのである。それは、「科学者のように実験し、観察し、科学者のように考えるという経験をする」（北村）ということもできる。ドクター・ワースの実験重視は、科学をただの知識と技術の集積としてではなく、物の考え方として教えるために不可欠な作業であったといえるだろう。

実験を媒介に、概念と現実の往復作業を重んじる教育をさらに普遍化したものとして、四年次総合演習（SIS）がある。自然科学科では、他の学

科に先駆けて第1期生からSISが開講された。最初のテーマは「生命」で、全教員と四年次の全学生が参加し、毎回白熱した論議となったという。その後、教師の負担が多すぎると廃止の動きが出たときに、ドクター・ワースは孤塁を守って、理念から説き起こしてSISの存続を主張したという。「SISでは、一つのテーマに対して、それぞれの専攻を生かして討論が行われる。種々の分野からの発表により、それぞれの発想の類似性や相違点相互の関係などを学生は高度の水準で理解することになる」（絹川、より詳しい実施要綱についてもメモがある、pp.78f）。

SISは科学の専門分野で承認されている理論（真理）が実は、ある視角から現実を切り取った説明であり、その意味で窮極的な「真理」というものではないということを理解し、科学技術の有効性と限界を知る機会であった。それは、キリスト者としてのドクター・ワースにとって、宗教・信仰の大切さを伝えるためにも、多くの人にどうしても知ってもらわなければならない事柄でもあった。『ジャパン・クリスチャン・クオータリー』が1985年に「科学とキリスト教信仰」の特集を組んだときには編集にたずさわり、自分でも「科学とキリスト教信仰」を寄稿した。ICU最後の年のキリスト教週間でも、「科学における信仰の役割とキリスト者の生活における信仰の役割」という話をしている。これらはともに、回想録におさめられている。

このような教育を受けた卒業生は、社会へ出て大活躍であった。たとえば、NHKTVで始まったばかりの科学教育番組担当となった卒業生は、大抜擢でプロデューサーとなり、番組に必要な実験装置を工夫して作り使いこなしていった。その過程で理科実験についての指導要領を正し、TVを‘デモンストレーション実験’として使う理科授業を小中学校に拡げるきっかけをも作った。しかも、このような教育は、ただ便利屋を創るためによかったというだけではない。ドクター・ワースの助手を経てアメリカの大学で博士を取得した人は、大学院入学生100人のうちから4人のドクターズ・キャンディデートの一人になれたのは、助手時代に「物理学全般を見渡

すことができるようになっていたから」(北村) だとしている。私たち10期生の物理専攻の学生は5人だったと聞いているが、大学院進学組も就職組も全員博士号を取ったということだし、当時から自然科学科では外部進学の壁を乗り越えてたくさんの研究者を出していた。

三. 教師として

編集者の一人高倉かほるはICU着任当時感じた「変な大学」の違和感を次のように述べている。「先生は先生らしくなく、学生は学生らしくなく。先生は、雲の上で威張っているのではなく、雲の上から下りてきて、学生に心底尽くすのです。先生と生徒の立場が逆なのです。……先生は自分の業績、出世のことなど考えずに、この小さな大学で……今この学生達にしてあげられること、してあげるべきことのみを真剣に考えているという風に私には見えました。」他の卒業生も、オープンハウスでドクター・ワース宅を訪れたときの感想を「夫婦も親子も互いにyouで話し合っている。……上下関係というか支配従属の関係が全く見られなかった」(佐柳)。「ドンちゃんはお父さん、いや、お兄さんのようだった。アメリカ人だということを忘れることさえあった」(宮内)。

「ポツダム宣言にいう‘民主主義的傾向’が新島襄や新渡戸稲造、内村鑑三を源流とするキリスト者の間で明治以来営々と築かれてきたこと、それが湯浅学長や無教会派の先生方を通してICUに流れこんでいた」(佐柳)とも言われる。ICUへアメリカから持ち込まれたキリスト教は、このような姿だったといえるだろう。アメリカ人も日本人もなく、教師も学生もなく、障害者も健常者もなく、富めるものも貧しいものもなく、一人の独立した人格として尊重されるコミュニティー、それが初期ICUが描いた理想であった。

しかし、60年代になると日本社会と学生の気質が変化していく中で、このようなコミュニティーは徐々にむしばまれていった。特に、67年の能研闘争とそれに続く69年の三項目闘争では、学生側が「バリケードに

よってのみ学生は大学と対等に立てる」と主張し、ICUのコミュニティーは事実として崩壊した。打開策を見いだせなかった大学と理事会が、機動隊を導入して本館・D館の封鎖を解除した。ドクター・ワースはこの後の69年10月に教養学部長事務取扱に就任、翌70年4月から4年、76年4月から再度4年教養学部長を務めた。「仏のドンちゃん」とまで呼ばれたドクター・ワースが、タカ派の執行部のメンバーとなったのである。しかもこの時は「過激派学生」に厳しく対処してICUの再建に取り組んだ。例えば、本館封鎖で授業ができなかった春学期の補講に参加しようとしなかった学生に対して、大学への復帰を促すため、3ヵ月以内に登録するように呼びかけをした。この3ヵ月ルールには反対の助手もいたが、ドクター・ワースは彼らの意見を聞き、「冷静に、そして断固として、ルールを訴えて、彼らを論駁した」という。

もちろん、地位は変わっても、ドクター・ワースの姿勢が変わったわけではない。理学科への視覚障害学生の受け入れの準備・実現に力を尽くし（吉野、田坂）、この時期に始められた夏期日本語講習の開設にあたっては、その責任者として自ら炎天下を駆け回って、参加者、教員職員ヘルパーに声を掛け、労をねぎらわれたという（川上）。そしてドクター・ワースの「第一に学生のことを考える」「誰に対してもその人の人格を尊重し謙虚に対応する」姿が、ICUに働く者の師表であったという。同僚の間にあるこの思いが、本書を作り上げたといっても過言ではない。

しかし、見逃してならないのはリベラルアーツ再建の試みである。ドクター・ワースはある日、警察力を頼んでの秩序回復に批判的で執行部から距離をとっていた絹川を訪れ、一般教育の再建についての意見を求めた。そして、その助言を入れて「一般教育再建の手がかりを作った」と絹川は述べている。そのために、一般教育カリキュラムの統括方法や時間割の配置など実際の改革も行われた（石川）。後に絹川はリベラルアーツの権威となるが、その基礎は開学当時に据えられ、「荒れた60年代」後の再編を経て育てられたものといえるかもしれない。

四. 平信徒伝道者として

このような35年の生涯を支えたのはもちろんドクター・ワースのキリスト教信仰であり、平信徒宣教者としての務めの自覚であった。15歳の頃に隣のカーソン夫妻の世話でワシントンD. C.の第四長老教会に通うようになり、17歳で受洗した。1945年、戦争が終わって、イエール大学院物理学科在学中に、彼は「平信徒宣教師」として海外に赴任する決心を固めた。平信徒伝道者のつとめを彼は「有能に誠実に教育の仕事に励むこと、様々な文化の中に多様性をもって現れるキリスト教信仰の一部として、中国人（初めは中国行きを予定していた）の同僚に同等な者として接すること」と考え、そのようにICUで働き、またICU教会のもっとも忠実な教会員であった。

先のNHKで働いた卒業生を評価する言葉として「彼は基本的に論理的な思考をする国際人だったと思う。彼が創ったものは、世界中のどんな文化の中でもよく分かる、よく通じる、よく説得する」というのがある。ドクター・ワースの英語は分かりやすかったといわれるが、それは彼が物理学者として事柄を明晰に論理的に語ったからではなかったか。荒れた60年代に続く70年代、ICUの混乱に満ちた再建期に8年も教養学部長が務められたのは彼の説明が多くの人に受け入れられるものだったからだろう。すべての人に愛を持って仕えた彼は、すべての人に「均しく」論理的であることによって支えられたのではないか。それは、原島鮮のための英文の弔電に大口が思わず涙したエピソードが語るように、バイリンガルのICUで、母語ならば無自覚に語感に包摂されるニュアンスを、洗練して伝えることによって、より明晰な言葉で論理をたてることを可能にしたからかもしれない。やはりICUの国際性、そして英語教育は、リベラルアーツの展開に不可欠というべきであろう。

ICUのリベラルアーツは、確かにその出発において、ミショナリーマインデッドなアメリカ人（古屋）と、キリスト教信仰に触れて「生きることと学ぶこと」を真摯に追求した大家たちによって、その基盤が据えられ、

自然科学科においては彼らと若い助手たちが共に教育に携わる中で、カリキュラム改革と教師の科学と学生指導にたいする姿勢を通じて、絹川学長の90年代まで継承されたといえよう。しかし、人文・社会科学科ではどうだったのだろうか。いうまでもなく、ブルンナーを別にしてもここにも神田盾夫、斉藤勇といった大家や、武田清子、秋田稔らの（若手！）研究者がおり、「荒れた60年代」以後にも、大塚久雄、斉藤真らを迎えて、学問と人生を追求した教師たちはいた。私も含めて多くの学生がその影響を受けた。実際、ICU外の大学で、新入生にも専門外の学生にも通じる授業を展開しているところには、必ずといっていいほどICUの卒業生がいる。しかし、リベラルアーツを、このような先生たちの個人的な影響力に帰してしまつては、大学が大衆化したこの時代にリベラルアーツを再生していく途はないだろう。技術万能、クイズに答えられる物知りが賞賛され、マネーゲームのグローバリズムが世を覆う現代に、『ICUリベラルアーツの心』は、果たしてリベラルアーツ再興の途を照らしてくれているだろうか。本書を読み、リベラルアーツの豊かな恩恵に浴した者の一人として、「現実と理論の間を、観察・実験を重ねながら何度も往き来して考え直す」という経験を、何とかして次の世代に残さねばならないとの思いを強くした。